

彙報

第十七回野尻湖クリルタイ

岡田英弘

第十七回クリルタイは、一九八〇年七月十三日(日)から十六日(水)まで、長野県上水内郡信濃町の野尻湖ホテルにおいて開かれ、五十名が参加した。

青木澄江(明治大学)、浅野悦子(同)、海老沢哲雄(埼玉大学)、藤井ゆかり(明治大学)、福原一夫(金沢大学)、八尾師誠(京都大学)、羽田明(四天王寺女子大学)・John Gombjoh Hangin (Indiana University)、林俊雄(古代オリエント博物館)、堀川徹(京都大学)、細谷良夫(弘前大学)、猪股健(立命館大学)、神田信夫(明治大学)、加藤直人(日本大学)、河内良弘(天理大学)、川上晴(大阪大学)、川又正智(国士館大学)、川瀬豊子(大阪大学)、菊地俊彦(北海道大学)、北川誠一(同)、小松久男(東海大学)、国木田明子(龍谷大学)、松田孝一、松村潤(日本大学)、宮脇淳子(大阪大学)、森川哲雄(九州大学)、森安孝夫(東京大学)、中島琢美(金沢大学)、中見立夫(東京外国語大学アジア・アフリカ言

語文化研究所)、西川さとみ(明治大学)、小田寿典、小谷仲男(鳥取大学)、岡田英弘(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所)、大葉昇一(早稲田大学)、大沢陽典(立命館大学)、佐口透(金沢大学)、佐藤明美(TBSブリタニカ)、佐藤道郎(岩手大学)、沢田勲(金沢経済大学)、設楽国広(千歳高等学校)、島田正郎(明治大学)、白鳥芳郎(上智大学)、鈴木隆一(早稲田大学)、植村清二(国士館大学)、梅村坦(東洋文庫)、八木和美(国士館大学)、山田信夫(大阪大学)、米林仁(北海道大学)、吉田金一、Peter Nizeme(ドイツ民主共和国科学アカデミー古代史考古学研究所)

今回の特徴は、昭和十六年の北海道帝国大学農学部林学科卒業以来、日本ははじめてというゴンボジャブ・ハンギン教授がサランゲレル夫人同伴で参加されたことと、東ドイツからベーター・ツイーメ君が出席されたこと、および女子の参加者が多く、十名にのぼったことであった。

七月十三日は、夕食前、現地集合。簡単な自己紹介、プログラム調整があった。

十四日の午前九時三十分から十二時までは恒例の *Conferences* の第一部となった。

青木はオスマン・トルコの研究を志し、イブラヒム・パンヤの本を読んでいる。植村はラシードの『集史』に出るフビ

ライ生誕時の逸事を例に引いて、書は通読せねばならぬと論じた。梅村は菊地らとともに中国を旅行し、『東洋文庫書報』十一号に報告、ベルリンの未刊ウイグル古文書七点を解説、『講座敦煌』第一巻に探検研究史を書く。海老沢はモンゴル帝国の外交史の研究を続け、『中嶋敏先生古稀記念東洋史論集』に『モンゴル使節』のルイ九世訪問事件について」を書いた。大沢は「北魏政權と漢人官僚」を書き、中国を旅行。『三田村先生古稀記念東洋史論文集』が近刊される。大葉は『早稲田大学大学院紀要』に「元朝怯薛管轄下の怯憐口」を書いた。

岡田は前年の「魯迅のなかの日本人」に続けて『中央公論』に「中国人はなぜ日本に無関心なのか」、「陸士同期留学生の中国革命」を書いて、近代中国における日本の意義を論じ、『諸君!』の「北京は中華民国を承認する」において中国の実情を明らかにし、「中公新書」の一冊として『宮中檔康熙朝奏摺』第八、九輯に基づいた「康熙帝の手紙」を出版して、一六九六、七年のガルダンに対するモンゴル親征の経緯を述べたが、その第一章「中国の名君と草原の英雄」中のハルハの情勢は、宮脇との討論に負う所が多い。また学術論文として『Outer Mongolia through the eyes of Emperor Kang-hsi』(『アジア・アフリカ言語文研究』十八号)、『How Hong Taiji came to the throne』(Central Asiatic Journal

二十三卷三・四号)が出た。他の単行本としては『国際誤解の構造』、『アジア文明の原像』、『世界の中の日本文字』、『西欧の正義 日本の正義』があり、いずれも共著である。十月にはソウルの第五回アジア文化学者会議(アジア国會議員連合主催)ではペーパー「The value of traditional culture in the industrializing society」を読み、朴正熙大統領の暗殺に遇った。十二月末には台北の第五回東亜アルタイ学会に神田、加藤、松村、中見、吉田らとともに出席。『Galdan's death: When and how?』を読んだが、このペーパーは『東洋文庫研究部欧文論叢』三十七号に載った。財団法人日本文化会議カルチャー・セミナーの第一期「国際誤解と戦略」を四月まで、第二期「八十年代日本のシナリオ」を五月から主宰し、同横浜セミナー「日本の課題に挑む」を八月から開設する。

小田はイスタンブールの国際トルコ学会に出席。『八陽経』ウイグル文題名について考えた。小谷は継続中だったイラクの遺跡発掘がハマリン・ダムの水没で終了し、初期イスラム文献で東方イスラム諸国について読んでいる。加藤は台北故宮博物院の軍機処檔案十九万件中、非漢文のものをすべてコピーした。『東方学』五十七輯に「清代起居注の研究」を発表。『東洋学報』六十卷三・四号の『年羹堯奏摺』の紹介において一七二三、四年の青海のロブサンダンジンの乱に関する

る通説を批判、『史学雑誌』の「回顧と展望」で中央アジアを担当した。川上は十八世紀のカザフ史から進んでジャー・ガル・ハーン国の滅亡を扱う。川瀬は『国立民族学博物館研究報告』四巻一号に「Hexamanis 朝初期における小家畜管理」を発表。河内は交換教授としてインディアナ大学ワラル・アルタイ学部で満洲語を教え、ハンギンを伴って天理大学に帰り、今西コレクション中の『崇徳三年檣』を整理中、また S. Durrant 訳の「Nisan Saman 伝」を書評 (JAS)。川又はイラク古代文化研究所で紀要を編集し、『考古地理講座』を学生社より刊行する予定。

神田は八月初に渡台、故宮博物院で檔案を見た。『宮中檔雍正朝奏摺』の刊行が進行中。十一月初旬、ソウルで元曉に関する仏教学会に出席。十一月下旬、南島史学会で石垣島を訪う。十二月末、第五回東亜アルタイ学会に出席。有斐閣の『概説東洋史』に「征服王朝の役割」、『月刊シルクロード』二・三月号に「清朝」を執筆。ブダペストの国際史学会の報告書に一九七二～七七年の日本における明・清研究について書く。『明治大学人文科学研究所年報』二十号に「満文老檔から旧滿洲檣へ」を載せ、『鑲紅旗檣』の乾隆朝の部を整理中。満文の「世管佐領執照」數種を研究、台北の東亜アルタイ学会で発表した。菊地は『北海道史研究』に「北海道考古学講座十 北海道と大陸文化」、ナウカの『窓』に「新疆ウイグ

ル自治区 ウルムチを訪ねて」、『史朋』に「中国北疆の考古学」を書く。

中食後、一時三十分から対岸の船着き場より湖上遊覧を行った。

午後は三時に再開、四時三十分まで Confessions の第二部があった。

北川は「ニクダリヤンの成立」(『オリエンント』)、モンゴル帝国とグルジア王国(『史朋』)を発表。国木田は修士論文「中国のガラス」を提出、周代より南北朝に及んだ。佐口はドーンソン『モンゴル帝国史』第六巻を訳し、一九四三年の内蒙古旅行日記を発表、十一月、三十五年ぶりに中国を旅行した。佐藤(明)は『ブリタニカ国際百科辞典』の小項目の改訂を担当、中国の古代、中世への集中を改めて近現代、周辺部の充実を目指す。佐藤(道)はチベット仏教を灌頂から解明せんとし、耶律楚材の仏教を研究。沢田はオンギン碑文を読了、吐蕃の紀功碑かと考える。設案は『史学雑誌』の「回顧と展望」に「イスラム時代」を執筆、中東研究所で「シャリーアと立憲制」について講演、三・三一事件についてオスマン朝の『年報』を読む。

島田は『遼朝史の研究』をまとめ、『清朝末期の近代法典編纂』が完成に近く、『中国法制史資料彙編』を続刊中。鈴木は修士論文「北宋の青唐族」を博士論文に発展すべく計画

する。中島は南走派ウィグルの研究を志す。

中見は『アジア・アフリカ言語文化研究』十七号に「ボグド・ハーン政権の対外交渉努力と帝国主義列強」を発表、日本モンゴル学会の春季大会（五月二十四日）のシンポジウム「現代モンゴル研究の視座」で国際政治学の立場から問題を提起、台北の中央研究院近代史研究所でキャプタ会議をめぐる外交渉を研究、東亜アルタイ学会では「The minority's groping: Further light on Khaisan and Udai」を読み、近く「中華民国の成立とモンゴル問題」を出す。西川は元朝下における四階級を研究。福原は卒業論文「五胡十六国時代の匈奴国家」を提出、大学院では北魏の成立前後の研究を志す。藤井は後期倭寇を研究する。

四時四十五分からは海外事情報告の一として、神田の「中国の明清檔案研究」があった。

神田は学術振興会と社会科学学院の間の学術交流覚書の調印式に出席する日本代表団に加わって北京に行き、人民大会堂の新疆の間の調印式には胡喬木院長も姿を見せた。山東の間の晩餐会では、社会科学学院の職員となった王光美の隣席であった。中国は劉少奇ブームで、どの街角にも生前のハイライトの組写真が貼り出してある。北京↓瀋陽↓北京↓西安↓広州↓上海と回って帰った。

北京の社会科学学院のほか、他の一級行政区にもそれぞれ社

会科学院があり、それらと北京大学、中山大學、復旦大學などの重点大學を訪問したが、どこでも文化大革命と四人組の悪口ばかり言い、文革以前の狀態にもどすことが当面の目標で、教授、副教授、講師、助教の身分の復活を進めている。そのほかにただの「教員」という人々が多く、文革中に入って来て、ランクがなく、ほとんど教育を受けていないので、再教育を実施中である。学部は講義を聴かせ、七十代の老教授に指導させている。大學は研究機関ではなく、中央、地方の社会科学学院が研究機関であるが、地方の社会科学学院は北京の指導は受けるが下部機構ではない。

中国の明清檔案研究はここ一二年に急に盛んになった。社会科学学院歴史研究所に清史研究室があり、『清史論叢』を出している。明清檔案部は、四月一日から中国第一歴史檔案館と変り、故宮博物院から國家檔案局に改属したようである。西華門内に北に四棟、南に一棟の建物がある。檔案の整理は文革以前に進んでいて、文革以後に再開された。九百万余件の五十パーセントは漢文、五十パーセントは滿文であるが、漢文の八十〜九十パーセントは整理済みで、滿文はほとんど手がついていない。内閣大庫檔の一部は台北の中央研究院に行っているが、残りとその他の宮中檔、軍機處檔、宗人府檔などはすべてこの中国第一歴史檔案館に回収されている。

滿文組長に会ったが、東京の滿文研究をよく知っていて、

『滿洲実録』、『滿文老檔』の有圈点本・無圈点本各一本、『崇徳二年檔』、および驚くべきことに『天聰九年檔』をしかも二種（元月より十二月十三日までが一冊、ダイジェスト版と見ゆ。元月から三月が一冊）を見せられた。『滿文老檔』は十二人で漢訳中で、太祖朝八十一冊は今年中に印刷に回す、太宗朝九十九冊は来年着手することであった。崇徳年間の六部の滿文檔冊もあるという。滿文のできる人は民族学院で養成したといい、現在二十六人が檔案館で働いている。檔案学は人民大学歴史系で教えている。

全国の滿文本のユニオン・カタログを作り、部数にして千部以上、種類にして七百種以上を載せた。

瀋陽の遼寧社会科学院歴史研究所には五研究室があり、東北古代史研究室は清朝以前、主として遼史を扱い、墓誌銘考釈二十万字を編纂中。清代史研究室は入関前を扱い、八人が働いている。東北近代歴史研究室は張作霖時代を扱い、東北現代史研究室は共産党史を扱う。もう一つ日本・ロシア関係を扱う研究室がある。遼寧檔案館には瀋陽故宮の檔案を収める。一九〇〇年にロシアが東北から持ち去った檔案のうち、一九五七年にソ連が返還したものは北京の第一歴史檔案館にある。ただし一六八九年のネルチンスク条約に関するものだけは、返還された分に含まれていない。

十五日（火）は午前九時から Confessions の第三部があっ

た。

細谷は『鑲紅旗檔』のゼロックスを完了、タイプを開始。乾隆朝は四百点弱で、雍正朝と文書の形式に差がある。東亜アルタイ学会では「八旗營運生息銀について」を読んだ。『軍機処檔案』の乾隆十七年の湖北の馬朝柱の乱に興味を持って分析中。堀川は「シャイバーニー・ハンとアルクーク城」（『史林』六十二巻六号）を発表、『宋元代の社会と宗教の総合的研究報告』において「ウズベク族とカザク族の『分離』について」論じた。Shah Mahmud Churas の Tarikh を読み、訳注を製作中。これはヤルカンドで書かれた東トルキスタン史である。

宮脇はアジア・アフリカ言語文化研究所の昭和五十四年度共同研究員として七月〜九月の五十三日間、岡田と Aagard, Steinfeld の十六七世紀のハルハ・モンゴルの系譜を読み、図表化を完成し、「十七世紀清朝帰属時のハルハ・モンゴル」を『東洋学報』六十一巻一・二号に発表、岡田の『康熙帝の手紙』を『月刊シルクロード』六巻二号に批評、『東洋史研究』の学界展望「わが国における十五〜十七世紀の北アジア史研究」を執筆した。森川は「四オイラト史記に見られるアムルサナの事蹟」（『森三樹三郎博士頌寿記念東洋学論集』）を発表、十一月の東方学会では「巴音塔拉盟史資料集成の康熙朝文書」を講じ、十二月の東亜アルタイ学会でもその英訳を

読んだ。『月刊シルクロード』六巻二号に「元朝」、七号に「北アジア史研究の現状と課題 一四—一七世紀のモンゴルを中心に」を、『史学雑誌』五月号の「回顧と展望」に北アジアを担当した。八木はイラクで発掘に二年間続けて従事した。山田は「古代テュルク史覚書」(『森論集』)、「内陸アジアの社会」(『概説東洋史』)、「テュルク・モンゴル系牧畜民の国家形成 匈奴の場合」(『国立民俗学博物館研究報告』)、「遊牧国家」(『月刊シルクロード』)を書き、パリのペリオ生誕百年祭でペーパーを読んだがこれは Journal Asiatique に出る予定。特定研究「文化摩擦」では函館の華僑を調査、六月のハーヴァード燕京客員集會では「東洋研究からアジア研究へ」を論じた。

吉田は九月、ソ連に一六七六年のスパファリ関係の満文奏摺を探訪に行き、ネルチンスク条約の地図など見せられた。一九〇〇年にロシアが持ち去った黒竜江、寧古塔、阿勒楚喀、渾春の摺案はミヤスニコフが周恩来に返したが、そのマイトロフィルムは中央公文書館にある。十二月の東亜アルタイ学会で台北に行き、中央図書館の地図を故宮博物院で見せてもらったが、なかに「吉林九河図」と題して Langtan の描いた、一三三C M × 一〇七C M の地図があった。四月に再訪してほぼ手写した。一六九〇年の製作と見え、羅振玉旧蔵の地図、トーマスの地図と一致し、デュ・アルドの地図とはち

がう。アマザル河は国境になっていない。韓国を訪れて、申時雨の『北征日記』の自筆原本を見たが、これは一六五八年に朝鮮軍が清に加勢してステパノフを殺したときの記録で、黒竜江の原住民に関する好史料である。米林は修士論文「オスマン朝初期の軍制」を提出。猪股は卒業論文に「渤海国の民族構成」を扱うつもり。浅野は明清の商人の生活を研究したい。松田は「モンゴルの漢地統治制度」(『待兼山論叢』十一号)、「元朝期の分封制」(『史学雑誌』八十八編八号)、「フラグ家の東方領」(『東洋史研究』三十九巻一号)を発表、『三田村記念論文集』に「雲南行省の成立」を書いた。羽田は著作集の編纂が進行中、モンゴル・トルコ語史料の訳注叢書の計画がある。パリのペリオ生誕百年祭では「茶と箸 歴史的言語史の一研究」を読んだ。

ツィーメは中央アジア・トルコ語を研究、特にベルリンのトルファン文書を専攻する。大阪大学の客員として百済康義と大谷コレクションのウイグル語仏教文献を共同研究し、新しい阿含経の断片、観無量寿経の韻文を発見。景教の祝婚歌を Annemarie von Gabain の碩寿論集に紹介。竜谷大学図書館でヨセフスの小断片を発見。PAC では「ウイグル文献の楽器」を読む。『西域考古図譜』に載った、頭頰を踏んだ農業用語を多く含む断片を再発見した。

ハンギンは Mongolia Society の事務局長を勤め、会員三

百五十人を擁し、M.S. Journal は五号、M.S. Occasional Papers は十一号、M.S. Special Papers は七号に達する。日本人の会員は四十名。このほど一年間、天理大学に交換教授として滞在した。北大卒業後、蒙疆自治政府の徳王主席の秘書を二年勤めた。渡米後、Lesing と蒙英辞典を共著。インディアナ大学ではハルハ語辞典を一九七六年以来編纂中、六万語を含む。口承文学選集を編し、別に文学選集を計画。JAOS に十七世紀以後の称号の語源を考証。

午前十一時五十分からは海外事情報告の二として、森安が一年九ヶ月のパリ滞在の見聞について語った。Bibliothèque Nationale の敦煌文書を、紙の質を含めて調査した。また Musée Guimet でウイグルの木活字、元代のウイグル仏典十数枚を発見した。B.N. にはウイグル文献三百六十三片が存するが、うち Nos. 203, 197, 195 はトルファンから敦煌へ送られた手紙で、名宛人はかのカイムトッパである。M.G. のペリオ遺稿が公開されたが、Nos. 1~200 は生前に活字となり、Nos. 201~230 は完成稿、Nos. 231~345 はメモである。敦煌日記四百枚は Mission Paul Pelliot Series に収めて刊行される。

午後二時三十分からは、おくれて到着した二名の Confessions があつた。

松村は『講座敦煌』（大東出版社）に「明・清時代」を執

筆。東亜アルタイ学会では「東洋文庫の満洲本」を読んだ。林はシリアに三ヶ月滞在学习して発掘に従事し、今度は学術振興会から一年間ブルガリアに派遣されてトラキア考古学を研究する。

二時四十分からは研究発表として、加藤の「年羹堯奏摺とロブザン・ダンジンの反乱」、小松の「フィトラトの『問答』について」があつた。

四時四十五分からは特別講演として、白鳥の「雲南の少数民族」があつた。白鳥は十一月から十二月にかけて三週間、社会科学学院の招待で、昆明↓楚雄↓大理（下関）↓洱海↓点蒼山↓麗江、昆明↓貴陽↓凱里苗族侗族自治州（人口、苗族七十八万、侗族四十五万）と旅行したが、その所見に触れつつ、この地方の民族移動の歴史について語った。

夕食後、八尾師がイラン革命当時のスライドを示しつつ経験を語った。

そして十六日（水）の朝食後、正式に解散した。